
SMASH!!

道木 優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S M A S H ! !

【Nコード】

N 2 7 6 9 Q

【作者名】

道木 優

【あらすじ】

愛知県立晴桜商業高校1年生の天地蓮^{あまちれん}。蓮は昨年、大阪府堺市立栄^え中学校野球部を全国制覇に導いた。誰もが高校では活躍するだろうと思っていたが、地区予選から全国大会までを一人で投げ抜いた蓮は、利き腕である左肘を壊してしまう。野球ができなくなった蓮はぐれて喧嘩ばかりしていた。蓮にはもうスポーツが無理だと医師からも言われていたが、高校に入ってからある男に出会い・・・。

第1話〜天地蓮〜

8月 東京ドーム

全日本中学野球選手権大会決勝

大阪栄中学さかえ vs 東京海東中学

栄中学2点リード

海東中学攻撃、9回裏ツーアウト満塁

「4番サード榎本君」
えのもと

「あと一人！あと一人！」

大阪市民の声が鳴り響く。

「天地あまち！、あと一人だぞ！頑張れー！！」

ベンチからも応援の音が響く。

(あと一人・・・あと一人だ・・・)

初球のフォークを投げた蓮の球はストライクゾーンギリギリで入っており、榎本は見送る。

第二球、榎本がカーブを狙いに行きフルスイングした榎本のバットは空を切る。

「あと一球！あと一球！」

ツーストライクから、思い切り投げたストレートは130km出しており、榎本は三振した。

「ゲームセット！」

3年生になつてやっと立つことができた中学野球の頂点。

栄中学の人々は興奮を抑えられずスタンドで大盛り上がり。

蓮も微笑み、喜ぼうとしていた時、左肘に激痛が走った。

そしてあまりの痛さで、蓮はマウンドで倒れてしまった。

「天地！？天地ー！！！！」

4月 晴桜商業高校
キーンコーンコーンコーン

3時間目開始のチャイムが響く。

チャイムが鳴ったと同時に、金髪の生徒が1年E組の教室の扉を開けた。

その金髪の生徒こそ天地蓮だった。

野球ができなくなり、ぐれて髪を染めていたのだ。

無言のまま、窓側の一番後ろの席に座る。

椅子に座り、何かの紙が机の中に入っているのに気がつく。

(これは・・・?)

その紙には“部活動案内”と書いてあり、野球部、サッカー部、陸上部などで練習している場所や成績が記されてある。

「うちの決まりで全員部活動に入らないといけないんだ。」

晴桜高校は部活が盛んで有名である。

故に、生徒は全員どこかの部活に入らなければならない。

「天地、確かお前中学では野球部だったんだろ？髪のを黒に戻して野球部に入ればいいじゃないか。」

「俺はもう野球はやらねえよ。」

せっかく先生が野球部への勧誘をしてくれたのに、蓮は冷たい返事を返した。

中学の全国大会後、病院で審査してもらったがもう野球はできないと判断されたからだ。

しばらくの間、“部活動案内”の紙を見て、何部に入るか決めようと思っていたら、気になる部活が書いてあった。

（ソフトテニス？）

テニスは何度も聞いたことがあるし見たこともあるが、ソフトテニスなど聞いたことも見たこともない。

少し興味を持ち、放課後の部活見学の時間にテニスコートに行ってみることにした。

放課後

学校をすぐ出たグラウンドは野球部とサッカー部で占領しており、テニスコートは裏門の外にある。

裏門の方へと歩いて行くと声が聞こえてきた。

「オラッ」

「もう一本！」

声がる方へと歩いて行くと、蓮よりも先に10人ぐらいの見学者がいた。

見学者の集まりへと歩き出す。

すると、コートの方からボールが転がってきた。

「すみません、そのボール取ってください。」

足元で止まったボールを拾う。

（ゴム！？）

掴んだ瞬間わかった。

テニスボールは硬いボールでやるスポーツかと思っていたが、ソフトテニスのボールはゴム製で、軟らかいボールでやるのだと知っ

た。

「あの・・・、ボール取ってください。」

「あ、ああ。」

ボールを丁寧に戻す。

「ありがとうございます。」

そう言っつてコートへとすぐ戻って行つた。

ウォーミングアップが終わり、練習を始めるようだ。

練習を見ていると、一番後ろの線にたくさんボールの入つたかごを置き、そこからネットにいるプレイヤーに向かって大きく弧を描くような球を出した。

ネットにいるプレイヤーは後ろの方へと走り出し、ボールを叩きつけるようにラケットを上から下へと思い切り振つた。

ボールはもの凄い速さで飛び、相手コートで大きくバウンドする。

(結構速いじゃん。)

練習が終わり部員はコートから出てきて、校外をランニングするように指示された。

「見学者全員集合。見学ばかりしていてもテニスの楽しさは伝わらないと思うし、今日の部活はここまでだから、空いたコートでやるか。」

そう2年の先輩が言い、ラケットを見学者に貸してくれた。

最初はランニング、体操をしてラリー。

蓮は未経験者だったし、見学者の中で一番下手だった。

数分ラリーをしていると、校外ランニングが終わつた先輩たちがコートに戻ってきた。

「少しはテニスの楽しさがわかってくれたかな？もう暗いし、今日はここまで。」

見学者はラケットを先輩に戻して、制服に着替えて帰る準備を始める。

「なあ、先輩。」

金髪で180cmオーバーの男に呼び止められ、脅える先輩。

「ど、どうした？」

「さっきのネットにいた人が打つやつがやりたいんですけど・・・」

「ネットにいた人が打つやつ・・・？ああ、スマッシュのことか。」

「でももう暗いし。」

「いいからやろうぜ！」

脅える先輩は渋々やることにした。

蓮はコートネットへと歩いて行く。

先ほどの練習と同じように大きな弧を描いて落ちてきたボールを、ラケットを使って思い切り叩きつける。

ボンッ！

蓮が打ったスマッシュは、さっきの先輩が打ったスマッシュよりも確実に速かった。

利き腕ではないのにそこまで速く打てたのは、フォームが野球のオーバースローに似ているからだ。

左腕が使えないと医者から言われたが、野球を諦められなかったから右腕を利き腕に変え、フォームまでは整っていたけど、左腕のような速球は投げるのと、変化球を投げられるまでどれくらいかわからなかったから野球を諦めたのだ。

先輩はそのボールの速さに驚き、啞然としている。

自分でもここまで速いボールを打てたことに驚いていた。

「け、経験者かな？」

「いや・・・。」

（経験者でもないのに、このボールの速さ！？晴桜高校の救世主が現れましたよ、鬼頭さん！）

第2話〜千石春水〜

1年E組

4時間目のチャイムが鳴り、昼休みが始まって5分後ぐらいに先輩が教室に入ってくる。

「なあ、天地。テニス部に入ってくれよ！お前のスマッシュは素晴らしい。」

そう言っただけで先輩、武藤が天地に近づいてきた。

3日前のスマッシュを見てから、武藤は昼休みになるたびに教室に入ってきてこう言ってくる。

「いい加減諦めろよ。あの日は暇だったし、どういうスポーツか気になっただけだから。」

「そんなこと言わずに入ってくれよ！お前のセンスなら・・・」

「お前お前って何様のつもりだ？うぜえな、出てけ。」

先輩であるのに、権力は蓮の方が上で、蓮に言われたように教室から出ていく。

「そんなこと言っただけでやんな。テニス楽しいぞ？」

隣の席から声がした。

「春水か。俺はもうスポーツやらねえんだよ。」

声の主は千石春水、彼も不良だがテニス部である。相変わらず冷たい返事をする。

春水は蓮の唯一の仲間で、理解者でもあった。

仲間がいなかった蓮に、なぜ春水は仲間になったかという・・・

入学式 晴桜高校裏門

「ううっ・・・。」

「さっさと立ちやがれ！」

金髪の大柄な男が髪の毛を掴みながらそう言った。

「まだまだ！」

もうボロボロなのにさらに殴り続ける。

「そんなもんにしとかないと、そいつ死ぬぞ？」

後ろから声がした。

そこにはドレッドヘアの男が立っていた。

しばらく沈黙が続き・・・

「ちっ。」

淡々髪の毛を掴んでいた手を離す。

ボロボロの男は必死で逃げて行った。

「誰だよ、お前？」

金髪の男がドレッドヘアに聞いた。

「俺は1年E組の千石春水だ。そういうあんたは？」

「1年の天地蓮。」

これが2人の出会いだった。

晴桜高校屋上

屋上にはドレッドヘアの春水が立っており、授業をサボっていた。

「この前は助けてくれてありがとう。」

でも1年坊のくせに、その髪型はちょっと調子に乗ってるんじゃないの？」

扉の方から声が聞こえたから振り返ってみると、そこには前蓮に

半殺しにされた先輩とその仲間3人立っている。
そして、いきなり3人同時に攻撃してきたが、

ポコッ

ドサッ

ドンッ

春水は一撃で3人を倒す。

「あぁうっ。」

「先輩だけになりましたけど、先輩から喧嘩売ってきたんだし、やつちやっていいですよね？」

「く、くそ、天地もお前もふざけやがって!!」

後ろポケットからスパナを取り出す。

「ぶっ殺してやる!」

スパナを使って春水を殴ろうとするが、2回、3回と空を切る。

4回目を振りかぶったら、足音が聞こえた。

先生かとビクビクしながら振りかえると、そこには蓮が立っていた。

「うるせえな。寝れねえだろーが!」

先輩は脅えて足が震えて、今にも泣き出しそうな顔をしている。
当たり前だ、ついこの前半殺しにされたのだから。

ドンッ

蓮に思いつきり蹴られ、先輩は大の字になって気を失った。

「またお前かよ。お前もさっさと失せろ。」

そう言つて蓮は煙草を吸う。

「何だと？」

言い争いをしてしていると、

「お前たち、授業中に何しとるか!!」

と大声が聞こえ、そこには先生がいた。

フーウツ

口から煙を出す。

「あ、天地……。ま、まあ早く教室に戻れよ？」

こつ言い残し、先生は小走りしながら立ち去る。

「俺を相手にしてくれる人なんていねんだよ。」

ボソツとしゃべり、教室へと行った。

蓮はボソツと言つたつもりだが、春水には聞こえていた。

1年E組

昼休みになり、春水は蓮と一緒に昼飯を食べるために椅子を動かし、蓮の机に飯を置いた。

「何だよ、来るんじゃないか。」

「いいからいいから。俺たち仲間だろ？」

「仲間……。」

「そ、仲間。この前助けてもらったし。大阪からこつちに引越してきて仲間なんていなかったら？だから、今日から俺が仲間になつてやる。」

大阪から愛知に引越してきた蓮に仲間などいるわけもなく、さらに金髪で大柄な体は人を近づかせなかった。

そんな彼を春水は仲間と言つてくれた。

蓮は照れて少し笑った。

「照れてんのか？かわいいところあるじゃん！」

「う、うるせえな。」

この日から蓮と春水が仲良くなるのに時間はかからなかった。

第3話〜晴桜の鬼〜

晴桜高校裏門

「頼む、テニス部に入ってくれ。」

蓮のスマツシユを見て以来、蓮をどうしてもテニス部に入れたい武藤は、1週間経った今も勧誘している。

「しつこい野郎だな。俺はもう他の部活に入ってるから諦める。」

「先輩、こいつはもう何言っても無理ですよ。さっ、部活部活。」

春水は武藤にそう言っていると武藤を引っ張ってコートへと走って行った。

蓮もテニスコートを横切って歩き始めた。

歩いていると、コートの方から声がした。

「天地つて奴は、とんだ腰ぬけ野郎だな。」

声をする方を睨むと、そこには武藤と蓮と同じくらいの身長の方が立っていた。

「そうなんですよ、鬼頭さん。」

帰ろうと思っていたが、こんな事を言われては怒りがおさまらない。

鬼頭が立っている方へと歩いて行った。

「誰が腰ぬけだった？」

「お前が天地か？てめーのことだよ。」

「何だとコラッ！ぶつ殺すぞ！」

「フツ、本当のことを言ったまでだ。武藤がこれだけ褒めて勧誘に行ってるのに、入らないなんてどうかしてるぜ。スポーツが怖いのか、腰ぬけ野郎。」

「うるせえ。ふんっ、こんな球遊びつまんねんだよ。」

「た、球遊びだと！？テニスを侮辱しやがって。じゃあお前の言う球遊びで勝負せんかい！！」

「上等だ。」

蓮は学ランを脱ぎ、春水からラケットを借りる。

準備運動をして、コートへと歩いて行った。

「ルールは簡単。俺が10ポイント決めれば俺の勝ち。お前が2ポイント決めればお前の勝ちだ。サーブは5本ずつで交代だ。」

鬼頭のサーブ。

あっという間にサーブだけで5ポイント先取した。

8本目、蓮のサーブ。

コートには入ったものの、激しいレシーブが返ってきてラケットに当てれない。

「侮辱しときながらこのレベルか？武藤は見る奴を間違えたな。」

「くっ……。」

9本目、蓮のサーブ。

ダブルフォルト（ ）で蓮の失点。

9ポイント取った鬼頭リーチ、絶体絶命。

10本目、蓮のサーブ。

蓮はサーブを打ったと同時にネットの方へと走って行く。

意表をつかれた鬼頭は、ボールがネットに当たってしまい鬼頭の失点。

鬼頭のミスで勝負は次の一本が最後となった。

11本目、蓮のサーブ。

今度はネットの方へと走る気配がなかったので、鬼頭はショートボールを打つ。

全力で走る蓮。

ツーバウンドギリギリでダイビングし、なんとかボールに触り鬼頭のコートへと返す。

「何っ!？」

ダイビングキャッチに驚いたが、今度こそ取れない場所へと山なりのボールを打つ。

「あのボールを触ったのは褒めてやる。だが、残念だったな。」
部員でこの勝負を見ていて、誰もが鬼頭の勝ちだと思った。

しかし、蓮はすばやく立ち上がって、後ろへと走りジャンプしてスマッシュを放った。

「おりゃーっ！」

ボンッ！

ボールは鬼頭のコートでバウンドし、沈黙が続いた。

「くそっ。」

鬼頭は何度も地面に腕を叩きつけた。

「き、鬼頭さんが負けた・・・!?!」

「はぁ。はぁ。俺の勝ちだ。」

蓮はコートから出て春水にラケットを返して、学ランを着始めた。

「楽しかったぜ、鬼さん。」

こう言い残してコートを後にした。

フォルト、ダブルフォルト・・・サーブで打ったボールがサーブスエリアに入らなかったときのコール。1ポイント中に2度フォルトすると「ダブルフォルト」となり、サーバーはそのポイントを失う。

第4話〜事件〜

鬼頭との試合から一週間後

あの日以来、武藤からの勧誘はなくなった。

だが、蓮自身少しはテニスの楽しさに触れ、よくコートの外からテニスをしている姿を見ている。

今日はコートに行かずに帰ろうと部室の前を歩いて行くと、部室の中から鬼頭と春水の声が聞こえた。

「すいませんね、鬼頭さん。あいつにスポーツへの情熱を取り戻すためにわざと負けるなんて言って。」

「別にいいさ。実際あいつも少しは情熱を取り戻したる？しかし、あいつの運動神経はすごいな。」

「そうですね。だてに中学最強投手のだけありますよ。」

春水はスポーツの情熱がなくなり、荒れている蓮を助けようと部長の鬼頭に頼んだのだ。

(クソ野郎……)

自分の事をここまで思ってくれる、自分を救おうとしてくれる仲間がいて、嬉しくて涙が自然と出てきた。

蓮は走って教室に戻り、担任の先生に入部の事について話をかける。

1年E組の担任の松岡先生はテニス部の顧問だ。

「松岡先生・・・俺、テニス部に入るよ。」

「本当か？よし、わかった。入部届けは今日出すが、期間が過ぎてるし処理に時間がかかる。明日本入部って事でもいいか？」

「やれるんならいつでもいいですよ。」

入部の話も終わり、笑顔で教室を出た。

テニスコート

「もう一本！」

武藤の声がかコートで響く。

放課後、テニス部はまだ4月だが汗を流しながら一生懸命練習している。

だが数分後、スポーツの汗から恐怖への汗に変わった。

テニスコートで事件が起きたのだ。

蓮や春水が入学した時に、屋上で喧嘩した3年の先輩の不良グループが7人テニスコートに乗り込んできた。

「千石春水、この前はよくもやってくれたな。」

「森田！？」

そこには7人の3年の不良グループが立っている。

「不良がスポーツ？笑わせんな。行け。」

森田が指示を出すと、6人の不良が一斉に走り出す。

そしてテニス部員に襲いかかった。

「うっ、うわーっ」

必死に逃げる。

だが、すぐに捕まり暴力を受ける。

「部員には恨みがねえが、あいつが入ったのが悪いんだ。悪く思うなよ。」

部員があちこちで殴られる。

春水は怒りで森田を殴ろうとした。

だが、武藤がそれを止め、首を横に振る。

「そいつはよく分かってるな。お前が殴ったら暴力事件でテニス部は廃部だ。はははっ、どうした？殴ってこいよ。」

「くっ。」

自分のせいでテニス部に迷惑をかけるわけにもいかず、春水は腕を下ろす。

腕を下ろすと森田は笑いながら武藤を蹴った。

「ぐはっ。」

「先輩！」

顔を蹴られた武藤は唇を切り、鼻血を出し血が春水の顔にかかる。

倒れこむ武藤を支え、ポケットに入っていたハンカチで出血を止めた。

周りを見渡すと、血を流して倒れている部員がほとんどだった。

春水は立ち上がり、叫んだ。

「殴りたいなら俺だけを殴れ！他の部員にはもう手を出すな！」

テニス部員、不良全員が春水の方を見る。

「いい心意気じゃねえか。いいだろう、じゃあゲームをしよう。俺

たち7人に殴られて立っていられたら、引き返そう。」

「・・・それで本当に引き返すんだな？」

「ああ、立っていられたらな。」

「いいだろう、やってやろうじゃねえか。」

春水は歯を食いしばり、腕を後ろでガッチリ組んで足を肩幅ぐらい広げた。

「ゲームスタートだ。」

一人、また一人と顔や腹などを殴る。

森田一人になった時はもうポロポロで、立っているのが奇跡に近かった。

「や、やるじゃねえか。」

そう言つと、残っていた最後の一人、森田が仲間から金属バットを受け取る。

「ひ、卑怯者が。」

「金属バットで“殴る”んだ。ルール違反ではないぜ？死にやがれ。」

金属バットを思い切り振りかぶった。

春水は覚悟を決めて眼を閉じる。

しかし何も起こらなかった。

金属バットは後ろにいる者により止められている。

「何だ？」

森田が後ろに振り返る。

不良グループみんなが立っていた人を見て驚く。

「な、何でお前が・・・？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2769q/>

SMASH!!

2011年2月11日21時40分発行